

名古屋大学理学部広報誌

「理 *philosophia*」

<http://www.sci.nagoya-u.ac.jp/kouhou/index.html>

第34号（2018年4月25日発行） p.3

<https://www.sci.nagoya-u.ac.jp/publication/files/pdf/34.pdf>

巻頭の「理のエッセイ」

日本の大学の世界ランキング

岡本祐幸 物質理学専攻教授

日本の大学の世界ランキングがどんどん落ちている。たとえば、U.S.News のデータでは、名古屋大学は2011年には世界91位だったが、2018年現在、247位である。また、東京大学は2011年に24位だったが、現在、57位であり、100位以内に入る我が国唯一の大学である。21世紀に入ってから17人（うち6人が名古屋大学関係者）もの日本人がノーベル賞を受賞しているのになぜと多くの人意外に思うだろう。いい加減な評価だからと無視する人も多い。しかし、なぜそうなのかを考えるのも必要ではないか。もちろん、近年の予算削減や大学改革の厳しい環境下で、大学の研究力が伸び悩んでいるという側面もあるだろうが、我が国の大学の底力を考えるとそれだけが理由であるとは考えにくい。

私は、一番の理由は、日本のもつ研究力を海外に発信する努力が足りないためだと考えている。世界ランキングの評価項目の1つに「reputation（評判）」があるからだ。米国の大学では、この「評判」を維持するために、学生への経済援助や広報に努力を惜しまない。また、大学の各研究者も、Google Scholarなどの個人プロフィールを用いて、積極的に自分の研究業績を英語で公開している。学生への経済援助は、日本の実情を考えると簡単ではないが、教員の研究情報発信ならばすぐにでもできそうだ。先日は、「評判」下落の原因がもう1つあることに気づかされた。国際会議で米国人の研究者と日本の大学のランキング急落について話したときのことである。彼は、即座に「以前は、日本からの博士研究員が多く海外に出ていたが、今ではその数が極端に少なくなっているのが原因です」と言った。よく考えると、これこそ「評判」を一番左右するものかもしれない。日本から留学生や博士研究員が海外に行くと、日本の大学でどれほどの教育を受けて来たかを海外の研究者が常日頃評価するわけで、結局、日本の大学の「評判」の良し悪しにつながるのである。だから青年よ、海外を目指せ。

Yuko Okamoto

1956年三重県生まれ。1979年ブラウン大学卒業。1984年コーネル大学大学院修了、Ph.D.の学位を取得。1984-1986年バージニア工科大学博士研究員。1986年奈良女子大学理学部助手（後、助教授）。1995年分子科学研究所助教授（総合研究大学院大学助教授併任）を経て、2005年より現職。専門は生物物理、計算科学。